

袖ヶ浦市中六遺跡

— 一般県道長浦上総線埋蔵文化財調査報告書 —

平成11年 3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

そで が うら し ちゅう ろ
袖 ヶ 浦 市 中 六 遺 跡

— 一般県道長浦上総線埋蔵文化財調査報告書 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第365集として、千葉県の長浦上総線道路建設工事に伴って実施した袖ヶ浦市中六遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代の土坑や弥生時代の溝が発見され、縄文土器や弥生土器が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年 3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による長浦上総線道路工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市蔵波に所在する中六遺跡(遺跡コード229-019)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、南部調査事務所木更津調査室長 小林清隆が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、君津土木事務所、袖ヶ浦市教育委員会、財団法人君津都市文化財センターの御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1:50,000地形図 「姉崎」 「木更津」
 - 第8図 国土地理院発行 1:25,000地形図 「姉崎」
 - 第7図 袖ヶ浦市発行地形図 1:2,500を改図転載
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
	(1) 調査の経緯	1
	(2) 調査の方法と成果の概要	2
2	周辺環境	3
	(1) 地理的環境	3
	(2) 周辺遺跡	9
II	検出した遺構と出土遺物	11
1	旧石器時代の遺物	11
2	縄文時代の遺構と遺物	14
3	弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	16
4	古代の遺構と遺物	21
III	まとめ	22
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡の位置(1:50,000)	1	第12図	第2石器出土地点の石器(1)	13
第2図	調査区の状況	3	第13図	第2石器出土地点の石器(2)	14
第3図	遺構分布図(1)	4	第14図	010・011土坑	15
第4図	遺構分布図(2)	5	第15図	採集した縄文時代の遺物	15
第5図	遺構分布図(3)	6	第16図	002・003	17
第6図	遺構分布図(4)	7	第17図	003出土遺物	17
第7図	調査区の周辺地形(1:5,000)	8	第18図	004・005・007	19
第8図	周辺の遺跡分布(1:25,000)	9	第19図	弥生時代～古墳時代の土坑	20
第9図	基準層序	11	第20図	道状遺構	21
第10図	採集石器	11	第21図	道状遺構出土遺物	21
第11図	第1石器出土地点の石器	12			

図版目次

図版1	1.平成7年度調査区(北から) 2.003遺物出土状況 3.1T調査状況	図版3	1.平成9年度調査区(北から) 2.第2石器出土地点 3.道状遺構
図版2	1.第1石器出土地点 2.010 3.011	図版4	1.出土石器 2.縄文土器 3.遺構出土土器

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯

千葉県は、館山自動車道、東京湾横断道路（アクアライン）等の建設に伴う周辺交通網の整備のため、接続道路の一つである県道長浦上総線の道路改良事業を計画した。県道長浦上総線は地域の幹線道路であり、交通量の増加が見込まれることから、歩行者の安全確保等に対応するための改良工事が必要となったものである。この道路改良事業のうち、袖ヶ浦市蔵波地区の工事に当たって、千葉県土木部は、千葉県教育委員会に対し、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を出した。これに対して千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後、遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県土木部との間で協議が重ねられ、その結果、発掘による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、千葉県との委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

ここに報告する中六遺跡は、平成7年度から平成9年度に断続的に発掘調査を行い、その後、平成10年度に整理作業を行って報告書の刊行に至った。なお、各年度の担当者と作業内容は次のとおりである。

○平成7年度（発掘調査）

期 間 平成8年3月4日～平成8年3月25日

調査研究部長 西山太郎、市原調査事務所長 森 尚登

担 当 木更津分室長 加藤正信



第1図 遺跡の位置 (1:50,000)

作業内容 上層本調査 450㎡

○平成8年度（発掘調査）

期 間 平成8年4月1日～平成8年4月30日

調査部長 西山太郎、南部調査事務所長 高田 博

担 当 木更津調査室長 小林清隆

作業内容 上層本調査 450㎡、下層確認調査18㎡/450㎡

○平成9年度（発掘調査）

期 間 平成9年7月1日～平成9年7月31日

調査部長 西山太郎、南部調査事務所長 高田 博

担 当 主任技師 加納 実

作業内容 上層確認調査 120㎡/1,155㎡、下層確認調査 40㎡/1,155㎡ 上層本調査54㎡

○平成10年度（整理・報告書刊行）

期 間 平成10年11月16日～平成10年12月28日

調査部長 沼澤 豊、南部調査事務所長 高田 博

担 当 木更津調査室長 小林清隆

作業内容 出土遺物の水洗・注記、図面・写真整理、遺物実測、挿図・図版作成、原稿執筆、報告書刊行

（2） 調査の方法と成果の概要

調査は3年度にわたって実施した。平成7年度の調査は、蔵波交差点から北へ約220mの位置から、南に折り返して110mの範囲の、現道両側の拡幅予定部分を対象に行っている。調査区は東西の幅が狭く、南北に長く伸びるため、面的な調査が望めないことは当初から明らかで、加えて表土や客土の堆積が厚く、拡幅範囲全域の表土除去は困難と予想された。そのような状況から、トレンチ調査を行い、その中で検出した遺構を精査することにした。

トレンチは第3図のとおり6か所に設定した。置き土や表土層を重機によって除去し、その後遺構の検出に努めた。なお、トレンチの呼称は、現道から西側の北から1T～3T、東側は4T～6Tとした。遺構確認の結果、土坑状の落込みが4か所と、溝が5か所に検出された。それらの遺構を精査したところ、5条の溝の中の1条から弥生土器が出土し、遺構の帰属時期が明らかになった。ほかの4基の土坑と4条の溝は遺物を伴っていなかったが、覆土の状態や、遺構検出面で採集した遺物から、弥生時代から古墳時代の所産と判断した。

平成8年度の調査は、第2図に示した区間が対象である。ここは今回報告する範囲の中で最も標高が高くなる地域で、盛土は無く、表土層も薄いと推測されたので、対象範囲全面の表土を重機によって除去し、ソフトローム層の上面で遺構を検出する方法をとった。そして上層遺構の調査終了後に、旧石器時代の確認調査を実施し、遺物包含の有無を明らかにすることにした。

上層の調査では2基の土坑を検出することができた。当初は葦波交差点付近に何らかの遺構が検出されるものと予想していた。しかし、慎重に遺構検出作業を進めたものの、遺構の存在は全く確認できなかった。一方、緩斜面である調査区の南側では、Ⅱ層中に裸の出土地点が認められ、その周囲を全体に掘り下げていくと、2基の土坑の存在が明らかになった。この土坑は、土層の状況から縄文時代に比定した。

上層の調査終了後、下層の確認調査に移り、5か所に設定した確認坑の1か所で石器の出土が認められた。出土層位は立川ローム層の第1黒色帯で、ナイフ形石器1点が出土した。その結果から周辺を拡張して調査したが、石器はもう2点が出土したにとどまり、分布が希薄であることが明らかになった。

平成9年度の調査は第2・6図の区間を対象に実施した。上層の遺構確認は12か所にトレンチを設定して行った。遺構は6Tで道跡が1条確認され、その周辺を拡張して調査を行った。そのほかのトレンチについては遺構は検出されなかった。なお、6Tで検出した道跡の時代的な帰属は、周辺で出土した土師器片から、奈良・平安時代の所産になると推測した。

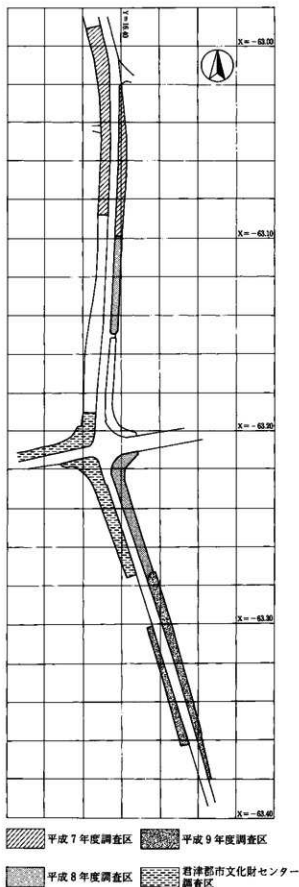
下層の確認は10か所で行い、その中の1か所で石器の出土が確認された。検出した層は、立川ローム層のⅢ層上部で、周辺拡張部も含め3点の石器が出土した。

以上の3回の調査によって検出した遺構は、旧石器出土地点2か所、縄文時代の土坑2基、弥生時代から古墳時代の溝5条、同じく土坑4基、奈良・平安時代の道1条である。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器の土器類と、旧石器時代と縄文時代の石器が出土している。

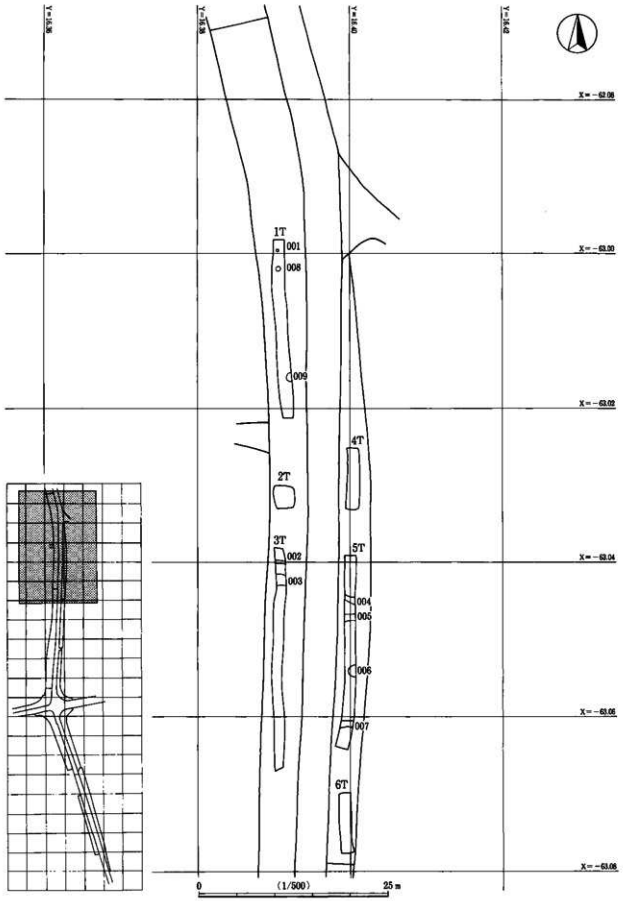
2 周辺の環境

(1) 地理的環境

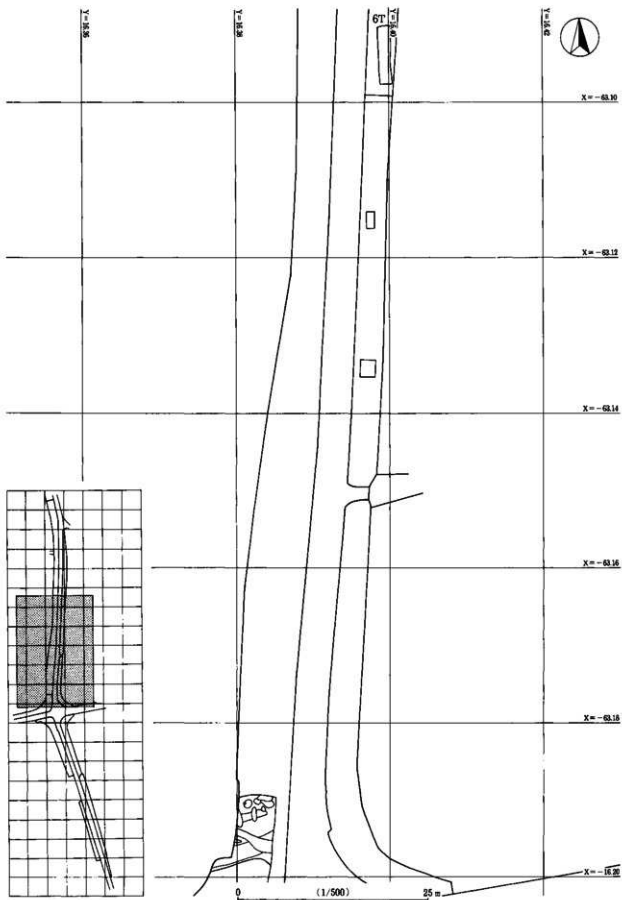
今回報告する中六遺跡の調査は、袖ヶ浦市葦波3,031-7ほかの周辺地域を対象にして実施している。袖ヶ浦市は、北を市原市、南を木更津市とそれぞれ接し、西側は埋立て地を挟んで東京湾に面している。今回の調査地点は、JR内房線長浦駅と館山自動車道姉崎袖ヶ浦ICの



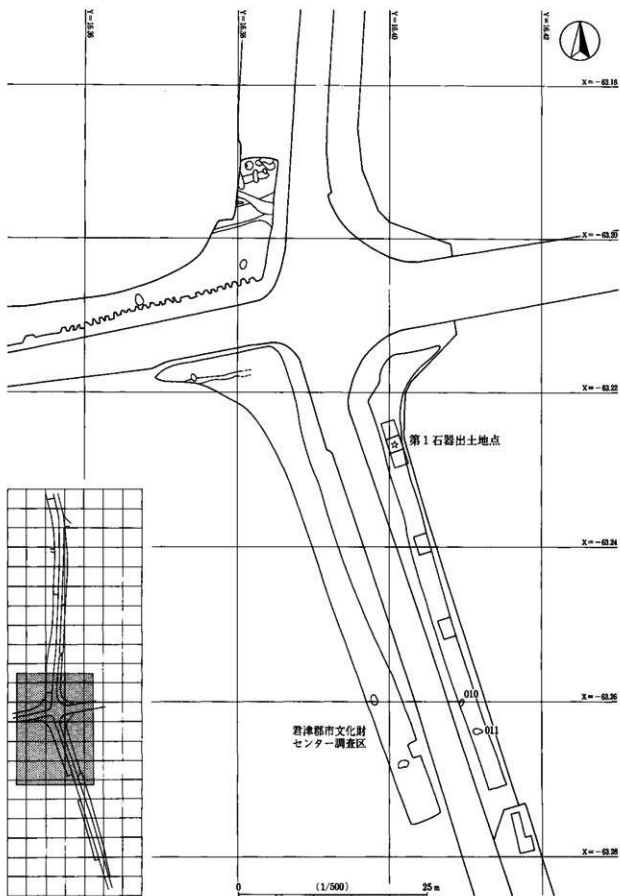
第2図 調査区の状況



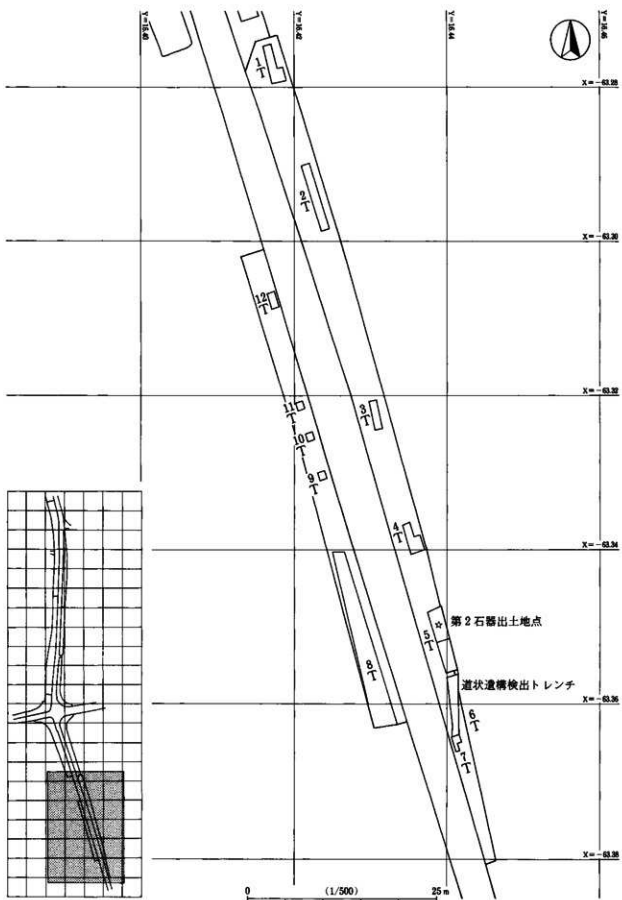
第3図 遺構分布図(1)



第4図 遺構分布図(2)



第5図 遺構分布図(3)



第6図 遺構分布図(4)



第7図 調査区の周辺地形(1:5,000)

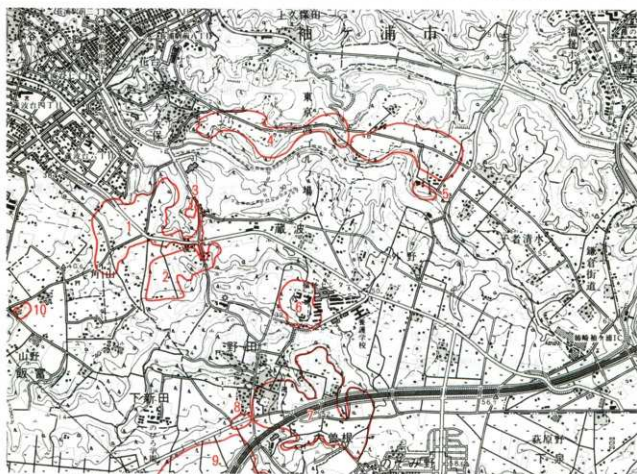
ほぼ中間の、県道長浦上総線が袖ヶ浦市道と交差する蔵波交差点付近になる。遺跡の所在する蔵波と呼ばれる地域は、現在の海岸線から3.5km東側に入った、下総台地の南西部の一角に当たる。本遺跡周辺では、北側を東京湾へと注ぐ蔵波川が、そして南側には小櫃川水系に属する小河川が台地を浸食して、幾筋もの複雑な樹枝状の谷が形成されている。遺跡の平坦部の標高は、西から東に向かって次第に高まる傾向が見られ、40m～45mを測る。蔵波川流域とは20mの、また、小櫃川流域の沖積地とは30mの比高差がある。

(2) 周辺遺跡

中六遺跡は東西に700m、南北に500mの広がりをもつと推測されている。ここに報告する地点は、中六遺跡全域の中では東端部に当たり、赤池遺跡や辻田遺跡と接している¹⁾。また、周辺には数多くの遺跡が周知されており、調査された遺跡も少なくない。次にそれらの成果の幾つかを紹介しておきたい。

中六遺跡(第8図-1) 千葉県文化財センターが調査を実施する以前に、君津郡市文化財センターによって調査が行われている。調査は、県道長浦上総線と蔵波交差点で交わる市道の拡幅工事に先行して、1次から5次にわたって実施されたものである。調査区域は、蔵波交差点を起点に西側に600mの区間である。また、蔵波交差点近辺については、県道長浦上総線の西側の調査が行われている²⁾。

旧石器時代の資料は、第1次調査時にソフトローム層から単独で出土した尖頭器や剥片がある。縄文時代になると、燃系文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器が出土し、石鏃や礫石斧も伴出している。ま



1. 中六遺跡 2. 赤池遺跡 3. 辻田遺跡 4. 美生遺跡群 5. 堂庭山B遺跡
6. 野田鎌倉街道遺跡 7. 山谷遺跡 8. 七人堀込遺跡 9. 関畑遺跡 10. 角山遺跡
第8図 周辺の遺跡分布(1:25,000)

た、遺構では条痕文期の炉穴、土坑の検出がある。古墳時代では堅穴住居跡が9軒調査され、いずれも出土した土師器から前期に比定されている。さらに時代が下ると、近世に構築されたと考えられる道が発見されている。しかし、道路の拡幅部分を対象にした調査のため、各時代の成果とも遺跡全体の傾向を呈示するまでには至っていない。

美生遺跡群(第8図-4) 蔵波川を挟んでその北側に展開する遺跡群である。開発に伴い7地点が調査され、各時代の多くの遺構が検出された³⁾。ここでは旧石器時代の調査も実施され、立川ローム層のソフトローム層からハードローム層の上部にかけての石器集中地点を検出している。縄文時代は早期を主体とする遺構や遺物が発見され、特に条痕文系土器の成果が充実した内容を示している。遺跡が最も盛行する時期は、弥生時代から古墳時代前期にかけてである。弥生時代中期では宮ノ台期の堅穴住居跡や方形周溝墓が検出され、弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、100軒を超過多数の堅穴住居跡が検出されている。また、第1地点では、古墳時代後期の堅穴住居跡20軒、奈良・平安時代の方形区画溝等も明らかになっている。

堂庭山B遺跡(第8図-5) 美生遺跡群の東側に隣接して展開する遺跡である。その一角を当センターが調査し、既に成果が報告されている⁴⁾。旧石器時代の調査では、石器集中地点が13か所発見され、また、縄文時代早期の遺物や炉穴が検出されている。古墳時代は後期前半の集落の存在が捉えられ、堅穴住居跡18軒を調査している。さらに奈良・平安時代の掘立柱建物跡や方形周溝状遺構等も検出された。

山谷遺跡(第8図-7) 中六遺跡の南東に位置する遺跡である。広範囲に展開する遺跡であるが、その一部が調査されている。そのうちの1か所は、館山自動車の建設工事に先行して行われ、通称「鎌倉街道」の一部を全面的に調査している⁵⁾。検出した遺構は、道跡や溝のほか、井戸、地下式土坑、土坑、ピット、整形区画遺構等がある。また、遺物では中国陶磁をはじめ、瀬戸、渥美、常滑窯の陶器が出土し、14世紀から15世紀に盛行した市の跡と推定されている。

注1 千葉県教育委員会 1982 『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)-市原市・君津・長生地区-』

2 井口 崇 1987 『中六遺跡-町道蔵波・木瓜台線工事に伴う埋蔵文化財調査-』(財)君津都市文化財センター

桐村修司 1993 『中六遺跡Ⅱ』(財)君津都市文化財センター

3 浜崎雅仁ほか 1992 『美生遺跡群Ⅰ-第1地点-』(財)君津都市文化財センター

浜崎雅仁ほか 1993 『美生遺跡群Ⅱ-第4・5・9地点-』(財)君津都市文化財センター

浜崎雅仁 1994 『美生遺跡群Ⅲ-第6・7地点-』(財)君津都市文化財センター

小高幸男ほか 1998 『美生遺跡群Ⅳ-第2地点-』(財)君津都市文化財センター

4 加藤正信 永塚俊司 1996 『袖ヶ浦市堂庭山B遺跡』(財)千葉県文化財センター

5 柴田龍司 1994 『鎌倉街道と市一袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から-』『研究連絡誌』第41号 (財)千葉県文化財センター

II 検出した遺構と出土遺物

1 旧石器時代の遺物

第2次及び第3次の旧石器時代の確認調査で、2か所から石器の出土が認められた。いずれも拡張して調査できる範囲が狭小なため、石器群の広がりを捉えるまでには至っていない。また、単独で1点、旧石器時代に比定できる石器が出土しているので、この資料についても併せて報告したい。

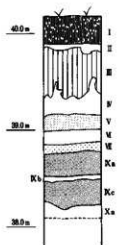
なお、関東ローム層の分層は次のとおり、当センターの基準に従って行った。

基準層序(第9図)

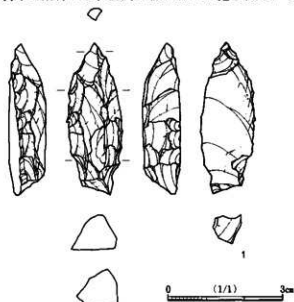
- | | |
|-------------|--|
| I層 表土層 | 耕作土や客土による置き土である。 |
| II層 褐色土層 | 場所によって堆積状況が異なり、平成8年度調査区内での堆積は薄く大部分が耕作土に取り込まれている。 |
| III層 黄褐色土層 | ソフトロームと呼んでいる層である。 |
| IV層 黄褐色土層 | ハードロームと呼んでいる層の上部層である。 |
| V層 暗褐色土層 | 立川ローム層第1黒色帯である。 |
| VI層 暗黄褐色土層 | AT(始良・Tn火山灰)を含む層である。 |
| VII層 暗黄褐色土層 | VI層より暗い。立川ローム層第2黒色帯の上部層である。 |
| VIII層 暗褐色土層 | 第2黒色帯の下部層で、Ka・Kb・Kcの3層に分層される。 |
| IX層 暗黄褐色土層 | 立川ローム最下部層。本来2層に分層されるが、今回は武蔵野ローム層の上部まで掘り下げていないので、層厚は明らかでない。 |

採集した旧石器時代遺物(第10図)

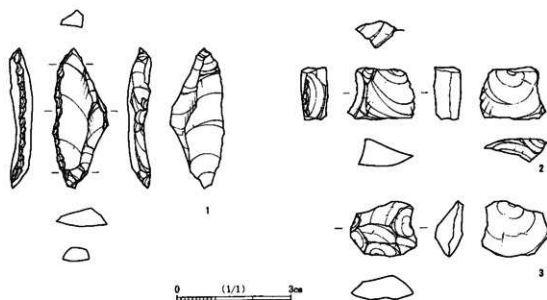
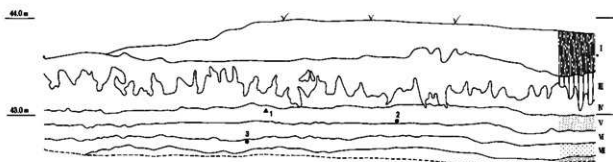
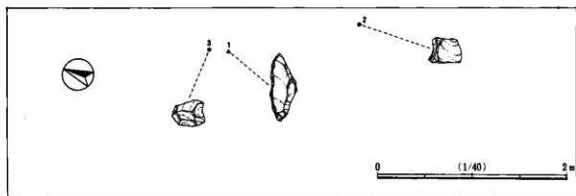
遺構検出作業中に採集した遺物の中に、旧石器時代に比定可能な石器が1点含まれていた。第10図に挙げた角錐状石器がそれである。安山岩のやや厚めの剥片を素材にし、全周に粗い加工が施されている。長さ39.0mm、幅14.5mm、厚さ9.5mm、重量5.32gである。平成8年度調査区内の採集である。



第9図 基準層序



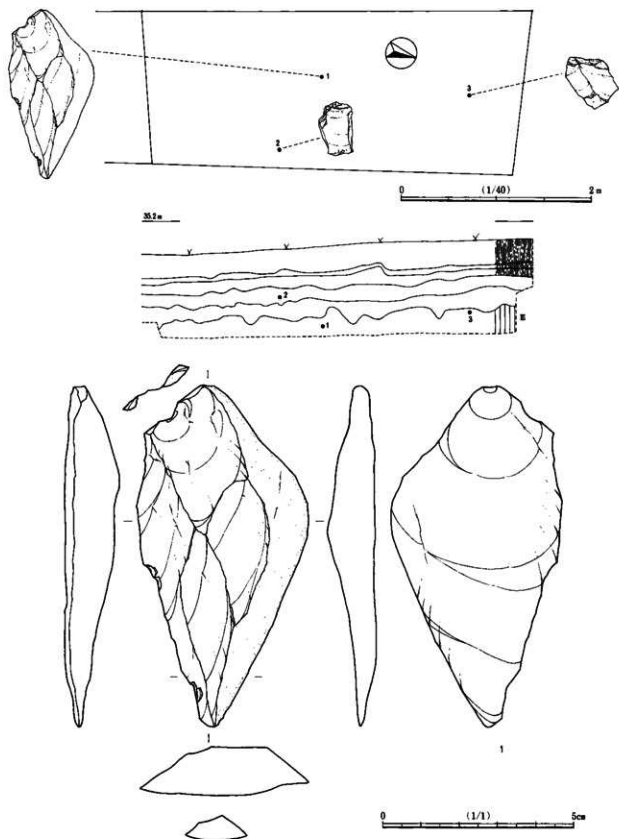
第10図 採集石器



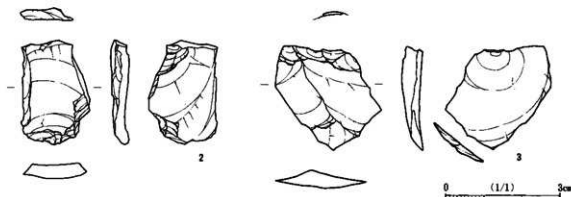
第11図 第1石器出土地点の石器

第1石器出土地点(第11図 図版2)

平成8年度調査区内における下層の確認調査の結果、1か所で石器の出土が認められた。周辺を拡張して調査したが、分布域の広がりは認められず、3点の石器が出土したにとどまる。出土層は2点がV層、VII層が1点で、垂直分布で32cmの高低差がある。第11図1はナイフ形石器である。頁岩製で長さ36.5mm、幅14.0mm、厚さ6.2mm、重量2.53gを測る。刃部欠損か刃部の再生を行った可能性がある。2は使用痕の認められるチャート製の剥片である。長さ13.5mm、幅18.0mm、厚さ7.0mm、重量1.72gである。3は表面の風化が進んだ安山岩の剥片である。長さ14.5mm、幅17.3mm、厚さ7.0mm、重量1.38gである。



第12図 第2石器出土地点の石器(1)



第13図 第2石器出土地点の石器(2)

第2石器出土地点(第12・13図 図版3)

平成9年度の調査区域内の、I層表土からII層までが厚く堆積する緩斜面部で検出した。出土層は、II層下部からIII層にかけてで、3点の石器が出土している。南西へ傾斜する斜面部のため、石器の出土層が土層断面図に正確に投影されていないが、現地における観察ではIII層上部と確認されている。石器の分布はトレンチ東側の2m×1mの範囲である。調査区外にも分布域が広がる可能性を残すものの、捉えられた範囲内での分布密度は薄いとしよう。

第12図1は原礫面を残す剥片である。石材は安山岩である。長さ88.0mm、幅45.0mm、厚さ9.0mm、重量46.62gと比較的大型な剥片である。第13図2は楔形石器である。チャートの剥片を素材にしており、形状は略長方形を呈している。長さ27.5mm、幅18.5mm、厚さ4.5mm、重量2.38gである。3は安山岩製の剥片であるが、第12図1の剥片とは母岩を異にしている。長さ27.5mm、幅28.0mm、厚さ4.5mm、重量2.89gである。

2 縄文時代の遺構と遺物

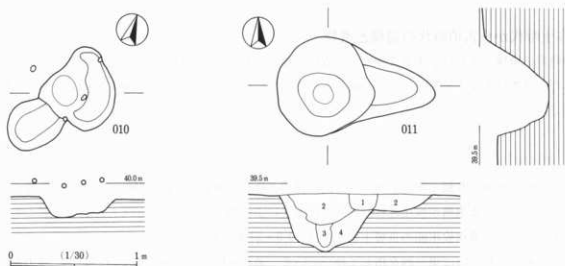
縄文時代の遺構は、平成8年度調査区の南側で検出した2基の土坑がすべてである(第5図)。道路部分を挟んだ西側で、君津郡市文化財センターによる調査が行われており、その際にも縄文時代と考えられる土坑が2基検出されている。遺物については、表土及び遺構検出作業時に出土した少量の土器、石器1点、礫が存在することとなる。

010(第14図 図版2)

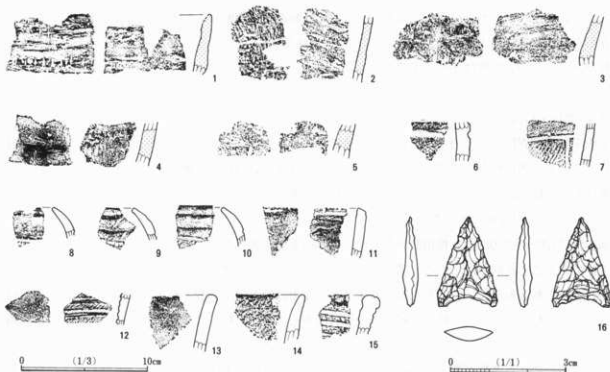
緩斜面部において検出した不整形の土坑である。平成8年度調査区の南側では、表土層の下に暗褐色を呈するII層が堆積し、その層で遺構の検出を進めていたところ、4点の礫がほぼ同レベルから出土した。そしてその周囲を慎重に掘り下げた結果、III層の上面で土坑の存在が明らかになった。土坑の規模は、長軸長65cm、短軸長60cmであるが、南西の調査区外にかけて拡がりを見せる。検出面からの深さは10cmである。土坑の掘込み面が不明確なため、II層中に出土した礫との関連は明らかでないが、礫の出土レベルの均一性から考えれば、何らかの繋がりを有していたことも否定はできないだろう。ただ土坑の性格は不明といわざるを得ない。土坑中から遺物は出土していない。

011 (第14図 図版2)

010の南側で検出した2段掘込みの土坑である。深くなる側は直径75cmの円形を呈し、検出面から56cmの深さを測る。浅い部分は円形部から柄のように50cm張り出し、深さは12cmで緩やかに立ち上がっていく。覆土は4層に分けられる。1層は黒褐色土で、ソフトローム粒を均一に含んでいる。2層はソフトローム粒に加え焼土粒を含む黒褐色土である。3層はソフトローム粒を多く含む暗褐色土である。4層は褐色土でソフトローム粒を主体にした層である。覆土に焼土を含む層が存在するが、土坑の底面には焼土化した部分は認められず、性格については不明である。遺構内からの遺物の出土もないが、II層を掘り込んでいることから縄文時代の土坑と判断した。



第14図 010・011土坑



第15図 採集した縄文時代の遺物

出土遺物(第15図 図版4)

第15図1～5は条痕文系土器で、茅山下層式と考えられる。いずれも胎土に繊維を多く含み、焼成が甘い。また、条痕が顕著なものは少なく、多くが表裏に擦痕状の調整痕を残している。6・7は中期後半の加曾利E式の深鉢の一部になるだろう。6は、隆起線に伴って沈線文が施文されている口縁下部の破片である。8～15は後期の加曾利B式である。8～10は口縁部が内側に屈曲する浅鉢の同一個体である。11～15は深鉢になる。

16はチャート製の石織である。全体に丁寧な調整を施し、整った形に仕上げている。完存しており、長さ23.0mm、幅15.5mm、厚さ4.0mm、重量1.0gを測る。

3 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

この時代の遺構と遺物は、平成7年度の調査区で検出されている。検出した遺構は溝状遺構と土坑である。また、遺物は弥生土器と土師器の小破片が出土している。次に検出した遺構の概要を、溝状遺構、土坑の順で述べていきたい。

002(第16図)

平成7年度調査区の北側で現道の西側3T内に検出された。003(溝状遺構)とは2mの距離をおいてほぼ並行している。本遺構が検出された周辺には客土による盛土が行われているため、表土層がかなり厚く、表土の上面から遺構検出面のⅢ層上面までは、1.5m前後を測っている。溝はトレンチに直交するような状況で検出され、ほぼ東-西を指して伸びている。道路を挟んだ東側の5T内において検出された004(溝状遺構)に繋がる可能性も否定できなが、その間の状況が不明なため断定は避けたい。

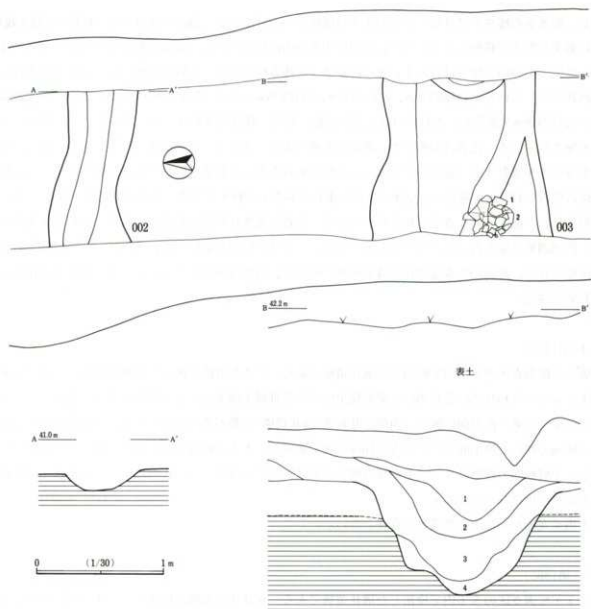
検出した範囲内で溝の幅は45cm～60cmであるが、溝底は20cm前後になる。検出面からの深さは15cmにすぎないが、掘込み面がかなり上位になることは、土層断面から判断可能である。溝底は平坦で、ピットは存在しない。遺物の出土は認められない。003(溝状遺構)と並行することから、構築時期が近接する可能性があるものの、性格は不明である。

003(第16・17図)

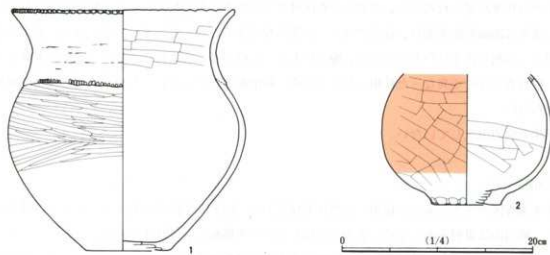
平成7年度調査区の3T内で検出した溝状遺構である。先述した002の南側に位置し、同遺構とほぼ並行する。東-西に伸びる溝で、5T内に検出した005(溝状遺構)に繋がる可能性があるが、途中で道路を挟むため断定はできない。西側は平坦部に続くと考えられるが、その状況は推測できない。検出したのはトレンチ内の1.2mにとどまる。

溝の幅は120cm～150cmで、検出面から底面まで45cm前後を測るが、土層断面の観察から掘込み面が35cmは上位であることが明らかである。溝の底面は平坦でなく高低が認められるが、小ピットの存在は確認されていない。断面形態は「U」形を呈する部分と、途中に段が付く部分とがある。覆土は4層に分層され、各層にローム粒が含まれる。特に3層とした層には多くのローム粒が含まれ、北側から流れ込んで堆積した状況を示している。

形が明らかになる遺物が覆土中から2点出土している。第17図1は、土圧によって押し潰された状態での出土した甕である。底部の中央部と口縁部の一部を欠くが、ほぼ全体が復元できた。胴部に球状の張り



第16图 002・003



第17图 003出土遺物

もたせ、頸部から緩やかに外反してそのまま口縁部につなげていく。胴部と頸部の間は輪積み痕を残し、そこに刺突を加えて装飾としているが、全周せず部分的に切れている。頸部は輪積み痕をヘラミガキによって消しているものの完璧には行わず、その跡が所々に残されている。口唇部は外面から押圧が施され、小さな波状を呈している。口径23.2cm、器高25.0cm、底径8.6cmである。胴部の膨らみは、器高のほぼ中間が最大になり24.8cmを測るが、これは口径を上回る値になる。外面の調整はヘラミガキであり、内面はヘラナデが施されている。色調は明褐色で、焼成は普通である。2は1と同じ位置で出土した壺である。胴部の約半分のみが遺存する。底部がやや厚く、球状の張りをもった胴部を作っている。胴部最大径は、胴部の中位に位置し17.7cmを測るが、全体に下位に重心があるかの観を呈する。胴部外面はナデを主にした調整が行われ、一部にヘラミガキも加えられている。赤彩が施された痕跡が認められるが、範囲は明らかでない。内面調整は横方向のヘラナデである。胎土にスコリア粒が含まれるが、ほかに目立つ混和物はない。焼成はやや甘く、外面の色調は現状では暗褐色や褐色で、内面は明褐色を示している。現存器高13.5cm、底径7.2cmである。

004(第18図)

平成7年度調査区の5T内で検出した溝状遺構である。こども道路を挟んだ西側調査区と同様に、表土層の上に客土が行われているために、遺構検出面であるⅢ層上面まで1mの深さがある。溝はトレンチに直交するように東-西方向に伸び、西側は002(溝状遺構)に繋がる可能性がある。検出範囲内での幅は50cm～80cmと狭い。検出面からの深さは10cm前後であるが、本来の掘込み面は上位にあったと考えられる。しかし、土層断面の観察によっても明確な掘込み面は捉えられなかった。底面にピットや落込みは存在せず、全体に平坦になっている。

覆土内や底面から出土した遺物は存在しない。

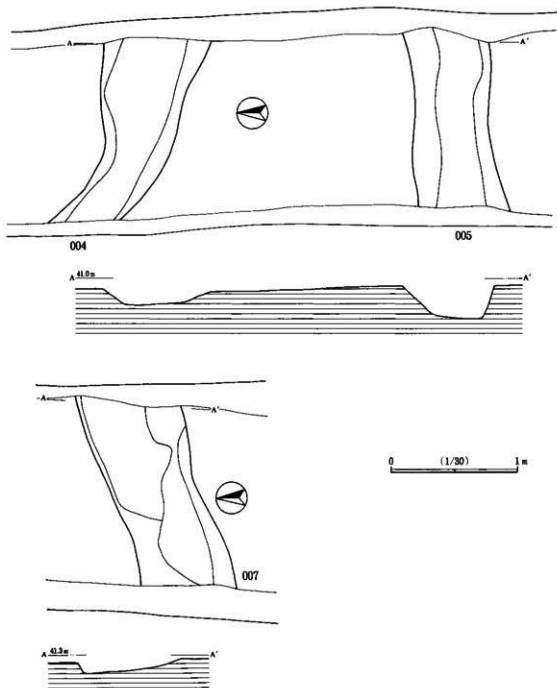
005(第18図)

平成7年度調査区の5T内で検出した溝状遺構である。004の南側に位置する。東-西に伸び、3Tの003に繋がる可能性がある。ただトレンチの東側で、004がやや南東を向き、005がわずかに北東を向くような状況が見られるので、東側の調査区外で交差するかもしれない。溝の幅は70cm内外で比較的一定し、深さは30cm前後を測り、底面にはピット等もなく平坦になっている。断面形は逆台形である。本来はⅡ層中から掘り込まれたと考えられ、覆土にもローム粒が多く含まれ、これらの点では003と共通するが、掘り方ではやや異なった様相を見せている。検出範囲が限定されるため、遺構の性格や規模は明らかにならない。

遺物は細片も含め出土していない。

007(第18図)

平成7年度調査区の5Tの南側で検出した溝状遺構である。同じ5T内の005とは13mの距離を隔てて存在する。検出面はⅢ層上面である。溝の方向はトレンチを横断し、ほぼ東-西方向を向いている。東側の状況は全く不明であるが、道路を挟んだ西側の3T内では検出されていないので、どこかで方向が変化するか、遺構の端部が存在すると思われる。検出範囲内での幅は65cm～80cmである。検出面からの深



第18図 004・005・007

さは10cm前後にすぎず、底面は平坦さに欠ける。ただ掘込み面はⅢ層より上位になるので、幅や深さは、本来の規模を示すものではない。

遺物の出土は認められず、その性格も明らかにならない。

001 (第19図)

平成7年度調査区の1丁内で検出した土坑である。今回報告する遺構の中で最も北側に位置し、南に2mの場所に008(土坑)が存在する。他の遺構との重複は認められない。本遺構は長径40cm、短径35cmの円形を呈し、検出面からの深さが37cmという小規模な土坑である。検出面はⅢ層の上面であるが、本来の

掘込み面はこれよりかなり上位と考えられる。

遺物の出土は認められない。断面形が逆台形を呈し、掘り方もしっかりしているが、構築目的は明確にならない。

008(第19図)

平成7年度調査区の1T内で検出した土坑である。前述した001(土坑)の2m南側に位置し、他の遺構との重複は認められず、単独で存在する土坑である。長径75cm、短径70cmではぼ円形の平面形を呈し、深さは10cmを測る。底部は中央部が最も深く、周囲から中央部に向かってすぼまっていく。

遺物の出土は認められず、遺構の性格は不明である。

009(第19図)

平成7年度調査区の1T内で検出した土坑である。1T内の南側に位置し、トレンチ内ではその一部が明らかになったのみで、トレンチ外に含まれる部分も存在する。検出した部分での長径は90cmを測るが、形態は明らかでない。検出面から底面までの深さは18cmである。底面は長径40cm以上と推測され、短径は35cmになる。

遺物の出土は認められず、また、全体が不明で、構築目的は明らかにならない。

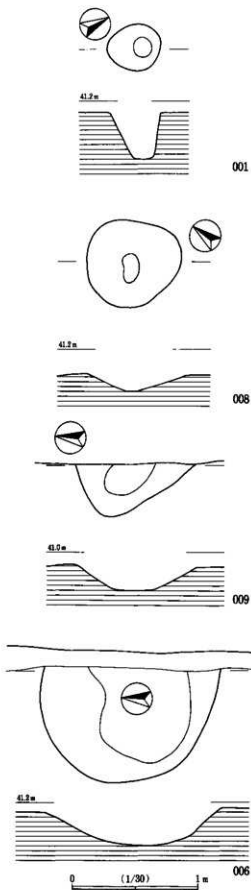
006(第19図)

平成7年度調査区の5T内で検出した土坑である。5T内に検出された005(溝状遺構)と007(溝状遺構)の中間に位置する。直径70cm内外の円形を呈する土坑と考えられるが、トレンチ内に検出できたのはその西側半分である。検出面の周囲から緩やかに底面に至り、深さは28cm前後になる。断面形は碗形を呈する。

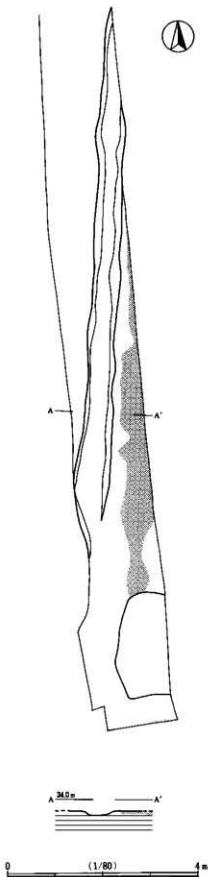
遺物の出土は認められない。

出土遺物

遺構内から出土した遺物は、003(溝状遺構)から出土した甕1点と壺1点にとどまる。平成7年度調査区全体を見渡してもわずかであり、本来の形が明らかになる



第19図 弥生時代～古墳時代の土坑



第20図 道状遺構

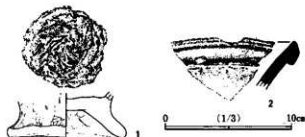
土器は存在せず、破片が少量出土したにすぎない。それらの中には、羽状縄文が施された弥生時代後期の壺や、内外面に赤彩が施された、古墳時代前期から古墳時代中期の碗の口縁部破片などが含まれている。

4 古代の遺構と遺物

道状遺構(第20図)

平成9年度調査区の南端の6T・7T内に硬化面が検出された。6T・7Tは現道の東側に設定したトレンチである。硬化面は、幅70cm、長さ10.5mに認められるが、南側の一部は木の根による攪乱を受けている。この硬化面の方向は、ほぼ南-北を向いて伸びており、それぞれ調査区外に続いていく。また、硬質面の西側には溝状遺構が検出されている。この溝は硬質面と同じ方向で伸び、さらに手前で硬質面が切れるので、同時期に存在していたと考えられる。溝の幅は60cm内外で比較的一定し、深さは5cm前後を測る。硬質面の東側の状況は明らかでないが、道に伴う排水溝である可能性が大きい。東側に溝が存在するならば、排水溝であることを確定できるし、本来の道幅も明らかになるので、この点は将来の調査機会に委ねたい。

硬質面の精査に伴い数点の土器片が出土した。第21図1は、その際に出土した土器器である。台付甕の台部と考えられ、底径8.8cm、台の高さ3cmを測る。台部の外面はヘラナデが施され、甕の内面底部にも螺旋状に加えたヘラナデ状の調整痕が認められる。2は須恵器の甕の口縁部の破片である。また、図示はしていないが、箱形を呈し全体に赤彩が施されたロクロ調整の杯の破片が出土している。



第21図 道状遺構出土遺物

Ⅲ ま と め

今回報告した中六遺跡の成果は、道路の拡幅範囲に限定された、極めて狭い幅の調査区の中で行った発掘調査の結果である。平成7年度の調査区は、東側には蔵波川水系に属する谷が入り、西側に平坦部が広がるという、中六遺跡全域の中の北東部に位置している。検出した遺構は、溝状遺構5条と、土坑4基である。溝状遺構は、多少の違いこそあれ、いずれも東-西方向に伸びていることが、共通の特徴として挙げられる。そしてその中の1条から、弥生時代後期の壺とほぼ完形の甕が出土した。このことにより、少なくとも003については、弥生時代後期に比定することが可能となった。ほかの4条の溝も、掘り込まれている層が同様であることから、時代的に大きな隔たりは存在しないと考えられる。ただ、周辺から古墳時代の土師器の破片も出土しているので、この4条の溝の時期は、弥生時代から古墳時代の間と推定しておきたい。また、土坑の構築時期についても、溝と同じように、弥生時代後期から古墳時代と考えられるだろう。しかし、遺構の性格は調査範囲の狭小さから明確にはならなかった。

平成8年度の調査区は、蔵波交差点を挟んだ平坦部から、やや南側の緩斜面という立地であった。検出した遺構は、縄文時代の土坑2基と、旧石器時代の遺物出土地点1か所である。縄文時代の土坑は、緩斜面部に位置し、2基が近接した状況で検出されている。現道を挟んだ西側の、君津都市文化財センター調査区の緩斜面部でも、縄文時代の所産と考えられる土坑が検出されており、周辺に同種の遺構が展開することが予想される¹⁾。旧石器時代の石器は立川ローム層V層から出土した。点数はわずかに3点であるが、中六遺跡内における初のハードローム層出土石器となった。

平成9年度の調査区は、全域が緩斜面部に位置している。遺構としては道跡が1条検出され、また、立川ローム層Ⅲ層から石器が出土している。道状遺構については、君津都市文化財センターの調査によって9条が検出されているが、いずれも硬質面の上を宝永火山灰が覆っていることから、近世まで使われていたことが判明している²⁾。また、周辺には「鎌倉街道」という地名も残っており、古道の存在を窺わせている³⁾。実際に山谷遺跡では、鎌倉街道と呼ばれている現道の下から中世の道跡が発見されるなど、周辺遺跡での道跡の調査が相次いでいる³⁾⁴⁾。その中には古代まで遡る道跡も存在している⁵⁾。今回中六遺跡で明らかになった道状遺構では、硬質面の上から奈良・平安時代の土師器や須恵器が数片出土している。それを根拠に古代の道状遺構に比定したのだが、道という長さを有する遺構の性格上、完全な姿を明らかにすることは難しい。今後構築年代、敷設ルート、廃絶時期が大きな課題となろう。

以上、検出した遺構を取り上げ、報告のまとめとする。

- 注1 桐村修司 1993 『中六遺跡Ⅱ』(財)君津都市文化財センター
2 大谷弘幸 1994 『西上総地域の古街道-いわゆる鎌倉街道を中心として-』『研究連絡誌』第41号 (財)千葉県文化財センター
3 柴田龍司 1994 『鎌倉街道と市一袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から-』『研究連絡誌』第41号 (財)千葉県文化財センター
4 今坂公一 1998 『山谷遺跡(2)』(財)君津都市文化財センター
5 諸墨知義 1992 『七人堀込遺跡』(財)君津都市文化財センター

1. 平成7年度調査区（北から）



2. 0 0 3 遺物出土状況



3. IT調査状況

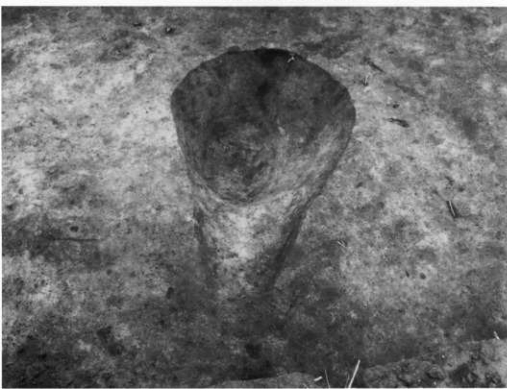




1. 第1石器出土地点



2. 010



3. 011

1. 平成9年度調査区（北から）

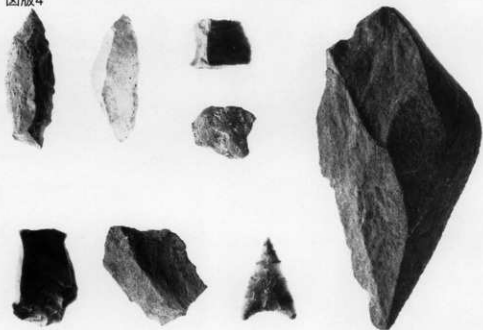


2. 第2石器出土地点



3. 道状遺構

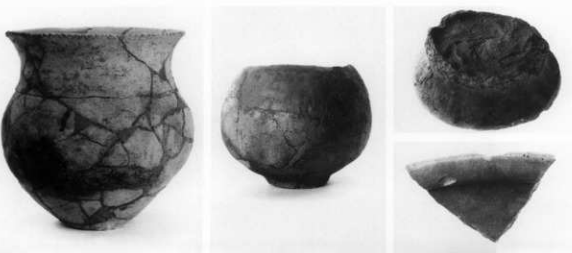




1. 出土石器



2. 縄文土器



3. 遺構出土土器

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしちゅうろいせき								
書名	袖ヶ浦市中六遺跡								
副書名	一般県道長浦上総線埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第365集								
編著者名	小林清隆								
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター								
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL. 043-422-8811								
発行年月日	西暦1999年3月31日								
ふりがな 所取遺跡	な 名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号					
中六		千葉県袖ヶ浦市蔵波3082-7ほか	12229	019	35° 25' 48"	140° 00' 50"	19960304～ 19960325 19960401～ 19960430 19970701～ 19970731	2,055㎡	県道長浦上総線 改良工事に伴う 埋蔵文化財調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
中六	集落	旧石器時代 縄文時代 弥生時代～ 古墳時代 奈良・平安 時代	石器出土地点	2地点	ナイフ形石器、剥片 楔形石器	縄文土器（早期、中 期、後期）、石鏃 弥生土器（後期） 土師器 土師器、須恵器			

千葉県文化財センター調査報告第365集

袖ヶ浦市中六遺跡

—— 一般県道長浦上総線埋蔵文化財調査報告書 ——

平成11年3月31日

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	千葉県土木部 千葉市中央区市場町1-1
	財団法人 千葉県文化財センター 千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷	大和美術印刷株式会社 千葉県木更津市潮浜2-1-10